

令和 3 年 6 月 28 日現在

機関番号：62608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00343

研究課題名(和文) 禅僧仮名法語の思想的なマッピング

研究課題名(英文) Doctrinal Mapping of the Zen monks Kanahog

研究代表者

ダヴァン ディディエ (DAVIN, Didier)

国文学研究資料館・研究部・准教授

研究者番号：90783291

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は中世から初期近世にかけて作成された仮名法語の思想的な分析によって、そのコーパスに見える禅の教えがどのように日本社会に広まって、どの具体的な内容であったのかを解明することを目標とした。新型コロナウイルスのため調査が多く中止になって、本来計画していたデータベースの作成は叶わなかったため、方向を変えて、前半の成果を踏まえて仮名法語の思想的観点から見える問題の検討に移った。ただし、新型コロナウイルスにともなう国際学会の延期によって発表は本研究期間後になる。その主な成果は国際共同研究の発表二つ(一つは期間後)、英文査読論文一本、発表と国際会議パネルの成立と発表(期間後)になる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

仮名法語の研究は主に書誌や内容の紹介を中心に行われた事に対して、本研究は今まで着目されていなかった思想的な面に焦点を当てた。それによって、仮名法語は単なる仏教 或いは禅 の入門書だけではなく、日本の禅思想史に見られる教義的や実践的な立場を反映している事を判明した。本研究は手始めではあるが、今後の仮名法語研究で、その文学的価値や社会への影響(日本人がもっている禅のイメージなど)のほかに、仏教学の検討をも視野に入れる必要があると証明されたことに十分意義があると思われる。

研究成果の概要(英文)：The goal of this study was to analyze the doctrinal content of the kanahogo produced from the Middle Ages to the early modern period in order to understand how the Zen teachings transmitted by this corpus spread in Japanese society, and in what specific ways. Because of the new coronavirus, many of the research were cancelled, and it was not possible to create the database originally planned. I had to change direction and, based on the results obtained in the first half of the program, moved on to examine some new questions. However, due to the postponement of the international conference caused by the coronavirus, some result will be present after the research period. The concrete results are two presentations in an international joint research (one after the research period), one English peer-reviewed paper, one presentation, and the formation - and one presentation - in an international conference panel.

研究分野：人文学

キーワード：仮名法語 臨済宗 大燈派

### 1. 研究開始当初の背景

「仮名法語」には一定の定義はなく、研究者によって指している物が異なる場合がある。従って、研究背景も変わる。本研究では禅僧の教えとして(その真偽を問わず)作成された書物—「禅僧仮名法語」と呼ぶことにしたが—に限定している。それを対象にする研究に早苗憲生と恋田知子による様々な調査結果などを紹介する貴重な物がある。しかし、基本的に文献学または文学的な研究であるため、近年著しく進んだ禅学の成果を反映していると言えない。また逆に、日本禅の研究者達の間、近世後期の盤珪や白隠などの法語は研究が進んでいる一方、近世初期の仮名法語を軽視される傾向があると言わざるを得ない。

### 2. 研究の目的

近世初期に作成された禅僧仮名法語が近世のみならず、現代に至るまでの禅のイメージに大変大きな影響を与えた。文学、文化、時に学术界にまでも、禅僧の教えを知るに、難解な漢文で書かれた禅籍よりも、比較的理解し易い仮名法語が参照されたことはしばしば見られる。二十世後半までに、禅学者の間でさえその場合があった。しかし、実際のところ著者の信憑性をはじめとして、禅僧仮名法語の内容についていくつかの問題点があり、慎重に扱うべき資料である。そこで、本研究では仮名法語を一つのコーパスとして概観しながら、最新の禅学の成果に基づいて、各々のテキストの分析を行い、それぞれの特徴を明確にする事によって、日本に出回っていた仮名法語が説いている思想が見える「マッピング」を提供する事を目的にしていた。

一見単純で基本的な教えにしか見えない仮名法語が多いことから、思想的な内容は浅くて、研究に値しないと思われていたが、しかし逆に考えれば極端に簡略された内容であるからこそ著者(その禅僧であったかどうかはともかく)伝えなかった教えが凝縮された。思想的な内容は勿論のこと、作成過程、流通などをまとめるデータベースも予定されていたが、それに必要な調査を断念せざるを得なかった。

### 3. 研究の方法

仮名法語の思想的な分析によって、分類するのは最初の作業になった。データベースの作成を念頭において当初の8種類を設定するつもりであった：

1-聖一派、2-夢窓派、3-大徳寺派、4-妙心寺派、5-盤珪、6-鈴木正三、7-曹洞宗、8-特定不能。ただし、中世と近世の禅僧の仮名法語の本質的な違いが浮上したため、後者(5と6番)を対象外にすることにした。分析の進行に伴い、公案を中心にする修行法—所謂「看話禅」—の位置が重要な指標であると判明して、その存在を中心に検討を進めた。なお、調査が不可能になったため、全体的な検討から、以下説明する経緯でテーマに絞って研究を進む事になった。

### 4. 研究成果

臨済宗の思想史を見れば、いくつかの異なった教義体上の姿勢がある事が分かる。特に、鎌倉時代に大きな影響力をもったのは密教と禅を兼修する流派(主には聖一派) また他宗の教え組み込もうとしたが室町時代に栄えた五山禅—所謂「教禅一致」—そして、「教門」(經典に書かれている教え)を強く拒絶して「禅門」しか認めない南北朝以降に誕生した大燈派であった。それぞれの代表僧に仮名法語が存在するので、そこにその思想が反映されるかどうかを確認するのは本研究の第一段階になった。中世の思想的状況が完全に反映していないものの、重要な点に室町後半の対立を継承していること判明できた。密教と禅を兼修する聖一派の教えは正保3(1646)に刊行された『東福聖一國師法語』に現れていない。禅密が室町時代に衰退した事から、仮名法語が作成された時にはもはや密教を禅と結びつく発想はなかったと推測できる。しかし、南北朝から始まる夢窓疎石と宗峰妙超(大燈國師)の対立はハッキリと仮名法語に現れるのは、本研究の大事な発見であった。寛文4(1664)年に出版された『夢想國師法語并詠哥』と慶安1(1648)年の『二十三問答』は夢窓疎石本人の法語であるかどうかは疑わしいが、思想的には『夢中間答集』などの他の作品に矛盾していないことから少なくとも夢窓の立場から書かれた書物であると言える。(夢窓疎石の仮名法語について、国際会議EJJSのパネルで余新星が検討する事になっている)そこには、禅だけではなく、「教禅一致」の立場から仏教全体の説明が見られる。そして、最大の発見は大燈派の影響力の大きさであった。大燈派は大徳寺と妙心寺を拠点にしていたが、徐々に日本社会に深く根を下ろし、思想的な面だけでなく、文化的にも、政治的にも臨済宗の主流になった。今まで、その影響と教えの内容は別々に考えられていたが、仮名法語を見れば近世に入ってほぼすぐに他宗に対しての排他性が目立つ事から、仮名法語を通して大燈派がもたらした禅の新しい常識と日本社会の関係を考え直す必要があると思われる。本研究が扱っている仮名法語は初心者向けのテキストであるため、その思想的な訴えが案外気づきにくい、推定読者- 仏道に入ろうとする初心者 - に公案の修行以外道がないと説くパターンが繰り返し見られ

る。禅宗は禅の教えを説くのは極当たり前な事に見えるが、以前書いたように（「脱鎌倉禅？ 純粹禅と大燈派についての一考察」、『中世禅への新視角 - 『中世禅籍叢刊』が開く世界』、臨川書店、2019、pp.459-478.）近年の研究を踏まえて考えれば、そこに日本禅特有の新しいアプローチがある。その新しい姿勢が大量に出版された仮名法語にあること自体は大きな意味をもっている。その成果を「北白川 EFEO サロン第 6 回」(フランス極東学院/京都大学共催)で 2019 年 06 月 28 日に講演の形で発表した。

その後、大燈派に焦点を当て直して、特に仮名法語に見える看話禅の分析に取り組んだ。室町後半から公案修行が大きく変わる、しかもその変化の元に大燈派にあると考えられている。その新しい看話禅の特徴は複数の公案を使用した体制にある。しかし、興味深いことに、本研究が対象とした仮名法語にはそれが全く現れない。つまり、大燈派から始まる排他的な禅が強く主張されている一方、近世後半までに実際行われていた禅—所謂「密参禅」—が仮名法語に見えない。となると、仮名法語から禅に対する日本独特の姿勢が見えると同時に、日本禅が生み出した修行方法を読者に紹介されていない。以上の分析結果を国文学研究資料館に行われた第 5 回日本語の歴史的典籍国際研究集会(令和元(2019)年 11 月 15 日)で「近世初期の日本人が見た“公案”と“看話禅” - 仮名法語を中心に」という発表で公開した。また、英文オンライン査読雑誌である *Studies in Japanese Literature and Culture*, vol. 3、「The *kōan* in Japanese Society at the Beginning of the Early Modern Period: *Kana hōgo* and *kanna-zen*」, p. 67-84 という題の論文を 2020 年に出版した。

その結果の他に、二つの方向に本研究の展望を考えて進んだ。一つは仮名法語の研究を促す事である。研究企画ではヨーロッパ日本研究協会 (European Association for Japanese Studies、EAJS) で発表する予定だったが、それに止まらずパネルの作成を申請した。パネルが認められたが、コロナ感染対策のため延期になって、2021 年 8 月 24-28 日のリモート開催になった。そこで、招待した慶應義塾大学の恋田知子と東京大学インド哲学院生の余新星で、本研究の成果とともに文学と仏教学を繋がる仮名法語の研究に活性化できると考えている。

一方、フランスのパリ大学と高等実習学院の随筆研究プロジェクト (Essais « au fil du pinceau » (zuihitsu) à l'époque d'Edo (XVIIe-XIXe : recueils de réflexions et d'observations sur le passé et le présent des savants japonais (pré-)modernes) に参加して、日本社会における仮名法語の位置と仮名法語・夜話・随筆を検討した。その成果は 2021 年 6 月 16 日のフランス語発表 « Le Zen en version japonaise : Les doctrines de l'école Rinzai dans les textes périphériques (*yawa*, *kana hōgo* et *zuihitsu*) » である。出版時期は未定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 ディディエ・ダヴァン	4. 巻 3
2. 論文標題 The koan in Japanese Society at the Beginning of the Early Modern Period: Kana hogo and kanna-zen	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Studies in Japanese Literature and Culture	6. 最初と最後の頁 67-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 ディディエ・ダヴァン	4. 巻 2
2. 論文標題 Between the Mountain and the City - Ikkyu Sojun and the Blurred Border of Awakening	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Studies in Japanese Literature and Culture	6. 最初と最後の頁 45-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 ディディエ・ダヴァン	4. 巻 5
2. 論文標題 「海を渡った禅 - 欧米「ZEN」の誕生」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 別冊サンガ5、「Zen」	6. 最初と最後の頁 100-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ディディエ・ダヴァン	4. 巻 38
2. 論文標題 「禅と俳句」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 特別講義号、総合研究大学院大学	6. 最初と最後の頁 1-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 ディディエ・ダヴァン
2. 発表標題 「大燈派の特徴を考えて 公案の扱いを中心に」
3. 学会等名 『フランスの研究者による禅研究』、東洋大学白山キャンパス、2018年6月16日（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ディディエ・ダヴァン
2. 発表標題 「脱鎌倉禅？ 純粹禅と大燈派についての一考察」
3. 学会等名 『中世禅への新視角 Part 『中世禅籍叢刊』が開く世界』、名古屋大学東山キャンパス
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ディディエ・ダヴァン
2. 発表標題 「中国に無視された聖典 『無門関』と日本の物語」
3. 学会等名 四川外国語大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ディディエ・ダヴァン
2. 発表標題 「室町時代の看話禅：体系化の芽生え？」
3. 学会等名 『看話禅国際學術會議：東アジア看話禅の時代的展開』、東国大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ディディエ・ダヴァン
2. 発表標題 La pureté comme orthodoxie : evolution du Zen medieval et du regard porte sur lui
3. 学会等名 Alterite et deviance religieuse. EFE0, Universite de Neuchatel, SFjE0
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ディディエ・ダヴァン	4. 発行年 2020年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 104
3. 書名 『無門関』の出世双六	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------